

# 大学生のライフスキルとスポーツ活動の関係

## ーフットサルに着目してー

スポーツマーケティングゼミナール 1314052 松田 実

### 1. 研究動機・研究目的

フットサルのようなチームスポーツにおいては、選手同士で活発かつ円滑にコミュニケーションをとり、互いの意思疎通をスムーズにすることが重要になる。コミュニケーションとは「対人関係の場における情報やメッセージのやりとり」であり、スポーツのチーム活動のあらゆる場面で大切な要素となるとされている(筒井・土屋, 2016)。筒井・土屋(2016)は、特に、試合中に選手間の相互作用の機会が多いゴール型ゲームは、よりチームパフォーマンスを最大に引き出すためにチームワークが重要となることを指摘している。

人間関係や対人苦手意識による離職を少なくするためにも、学生時代にライフスキルを高めることが重要である。そこで、チームスポーツであるフットサルとライフスキルの関係に着目した。

### 2. 研究方法

本研究はFFCカレッジフットサルリーグに所属する大学生(1年生43名、2年生20名、3年生21名、4年生19名)を対象とした。質問項目は、個人的属性と島本、石井(2006)によって作成された日常生活スキル尺度(大学生版)24項目を使用し、11月23日(木)にエフネットフットサルクラブ東川口で行われたFFCカレッジフットサルリーグ第37日に参加していた大学生と11月24日(木)J大学のフットサル部を対象に質問紙調査を行った。調査への協力を賛同した方に対して質問紙を直接配布し、その場で回収する集合調査法を用いた。

すべての項目について単純集計を行い、全体の傾向を把握した。すべての分析においては統計パッケージであるIBM SPSS Statistics 22を用いて分析を行った。日常生活スキル尺度(大学生版)18項目においては、4段階尺度を使用した。4段階尺度を等間隔尺度とみなして、分散分析による平均値の差の比較の分析を行った。

### 3. 主な結果と考察

学年によるライフスキル得点の比較を行った。その結果、親和性( $F(3, 99) = 3.446, P < .05$ )に有意差が認められた。多重比較を行ったところ、「1年生」と「3年生」の間に5%水準で有意差があり、1年生の方が3年生よりも親和性が有意に高い得点が認められた。チーム内での役割によるライフスキル得点の比較を行ったが、有意な差は見られなかった。

現在のポジションによるライフスキル得点の比較を行った。その結果、前向きな思考( $F(3, 99) = 3.930, p < .05$ )に有意差が認められた。多重比較を行ったところ、「ゴレイロ」と「ピヴォ」の間に5%水準の有意差があり、ピヴォの方が前向きな思考が高いことが分かった。ゴレイロとはサッカーでいうゴールキーパーであり一つのミスが失点になることもある。それに対してピヴォは得点に関わるプレーが求められるポジションでシュートを外

しても次にまたチャンスが来るポジションであるために一つのミスに対する気もちようが変わると考えられる。また、リーダーシップではゴレイロが高い得点であることを見ることができる。ゴレイロは守備の要として味方へ指示を出し、チームをまとめるポジションであるためリーダーシップがほかのポジションに比べて高いと考えられる。

種目を問わないスポーツ経験年数別によるライフスキル得点の比較を行った。その結果、親和性 ( $F(2, 100) = 3.562$   $p < .05$ ) に有意な差が認められた。多重比較を行ったところ、「低群」と「高群」との間に5%水準の有意な差があり、低群のほうが高群よりも親和性が高いことが明らかになった。

練習頻度別にライフスキル得点の比較を行ったところ、感受性 ( $F(2, 100) = 3.221$ ,  $p < .05$ ) と前向きな思考 ( $F(2, 100) = 3.242$ ,  $p < .05$ ) に有意な差が見られた。多重比較によれば感受性において「中群」よりも「低群」が低く、前向きな思考において「低群」よりも「中群」の方が低いことが明らかとなった。前向きな思考に関しては日々の練習を通して日々よくなろうという志を持ちながら練習に励んでいるのではないかと考えられる。

現在の競技レベルによるライフスキル得点の比較を行った結果、石黒 (2006) の研究では競技レベルが上がるにつれてライフスキルに有意な結果が見られたが本研究の結果では有意な差は見られなかった。

#### 4. 結論

本調査におけるサンプルにおいては、約8割が大学に入ってからフットサルを始めており、競技レベルに関わらず競技志向として参加している学生が約8割いた。

学年、チーム内での役割、ポジション、スポーツ経験年数、練習頻度、競技レベル、それぞれの項目においてライフスキル得点の比較を行ったところ、学年、ポジション、スポーツ経験年数、練習頻度において5%水準での有意差が認められた。フットサルに関連する項目としては、ポジション特性との間に関係が認められたが、その他の項目では、必ずしもフットサルのみの影響とはいえない結果となった。一方で、スポーツ経験がライフスキルに対して、何らかの関係を持つことが示唆される結果となった。なお、フットサルだけの影響を抽出して、ライフスキルとの関係を見ることができないため、他のスポーツとの比較が今後の課題と言える。

#### 5. 卒業論文の執筆を終えて

卒業論文を執筆するにあたり、とても多くの方々からのご指導、ご協力を賜りました。この場をお借りして心より感謝申し上げます。指導教官である工藤康宏先生には、多忙の中時に厳しく時にやさしくご指導していただき大変感謝申し上げます。また、突然の訪問にも、優しく指導していただいた渡先生、山田先生、渡邊先生、廣津先生ありがとうございました。突然のお願いにもかかわらず快く引き受けてくださった一般財団法人 FFC スポーツアカデミーの鈴木陽二郎さん、また試合後疲れている中にもかかわらずアンケートに回答してくださったチームの方々みなさん。順天堂大学フットサル部 GAZIL/jfc のみなさん、その他ご協力を頂いたすべての方々心より感謝を申し上げます。ありがとうございました。